

有明海における二枚貝について  
(第15回評価委員会(H17.9.12)・伊藤委員)

・有明海のアゲマキ

- ・佐賀県沿岸において1909年に漁獲量14,652tを記録したが、その後は2,000t前後となり、1920年代後半以降は1,000t未満に留まっている。近年は1988年の約800tのピークを最後に激減し、1992年以降はほとんど漁獲がない。
- ・1980年代は佐賀県西部海域から、筑後川・矢部川・白川河口域に漁場があり八代海にも生息していた。1988年夏季に、湾奥西部および中部の養殖場で大量斃死が発生し、1ヶ月で漁場全域に約3年で湾東部まで拡大した。
- ・斃死個体からビルナウイルスが検出されているが、現在の資源量が皆無のため、斃死原因として特定するのは困難である。

・有明海のサルボウ

- ・佐賀県沿岸において、1970年代初頭には約14,000tの漁獲量があったが、その後、斃死が発生し漁獲量が激減した。斃死は昭和60年を境に収束し、佐賀県では10,000t台の漁獲を回復したが、近年、やや減少傾向にあり変動幅も大きくなっている。
- ・漁場は佐賀県西部および中部海域の養殖場、および矢部川河口域である。
- ・昭和40年代後半から夏季に斃死が発生。斃死は岡山県・山口県でも同様にみられたが、斃死貝は有明海から持ち込まれたものであった。昭和60年を境に斃死は収束し、岡山県・山口県でも同様な傾向を示した。このことから、有明海産種苗の活力低下が斃死につながった可能性が指摘されているが、活力低下の原因は不明。
- ・近年の漁獲での変動要因としては、シャットネラ赤潮、貧酸素水塊、採苗時期の気象環境要因、ナルトビエイの食害等が指摘されている。

・有明海のアサリ

- ・熊本県沿岸において、1977年に約65,000tの漁獲があったがその後は2,000t前後で推移している(2003年は約8,000t)。
- ・1980年代と2000年代で比較すると、漁場が岸に寄っており、また筑後川河口域では漁場が減少している。また、熊本県の主要漁場(荒尾地先・菊池川河口域・白川河口域・緑川河口域)においては、緑川河口域の漁獲量の激減などがみられる。
- ・アサリの減少要因としては、漁場の減少、大雨や猛暑等の環境要因による大量斃死、過剰漁獲、食害などが考えられる。

## ・有明海のタイラギ

北東部海域（大浦漁協と大牟田を結んだライン以北の漁場）における長期的な資源の減少と近年得られている知見について、以下にまとめる。

### -1 長期的な資源の減少について

- ・大浦漁協資料によると、1970年代は貝柱漁獲量が1,500tを越えていたが、その後、300～400t前後で推移している。
- ・1976年から1999年まで、佐賀県海域（入会）のタイラギ成貝の生息量を調査したところ、1990年前後を境に漁場が東側に偏ってきている。
- ・1989年と2000年の底質の調査結果によると、2000年にはMd 7の部分が湾中央まで広がっており、底質の細粒化・泥化が進行していることが予測される。このような底質の変化が、漁場の縮小の原因になっていることが推測される。

### -2 近年の知見

- ・2003年から浮遊幼生と着底稚貝の分布域を調査し、1981年と比較したところ、浮遊幼生はこの間中西部に広く分布しているが、着底稚貝の漁場は東側に偏ってきている。このため、着底後に斃死した可能性が高く、底質が生残に関与しているものと思われる。
- ・成貝の大量斃死：着底から約1年後の5月頃から大きさに関係なく発生する。着底3ヶ月後には活力が低下する、干潟域では大量斃死は発生しない、鰓や腎臓にウィルス様粒子が確認されるなどの知見が得られているが、原因は不明である（貧酸素は主因ではない）。
- ・成貝の消失：4～11月に成貝が突然消失し、海底にバラバラの殻と窪みが散在する。ナルトビエイによる食害が主な原因とされている。